

創立80周年記念特集号編集小委員会委員長 小 指 軍 夫 (NKK 技術開発本部)

本年日本鉄鋼協会創立80周年を迎えることは、会員一同の大きな喜びであります。この機会に創立70周年に続いて「鉄と鋼」80周年記念特集号を会員の皆様のお手許にお送りすることになりました。顧みますとこの10年は日本鉄鋼業にとって激動の10年間であり、その変動は未だ落ちつく気配を見せておりません。日本鉄鋼業は1973年に粗鋼1億2千万トンの生産量を記録した後成熟期に至り、その後円高不況、バブル経済の時代を経て現在かつて経験したことのない厳しい経済的危機に直面しております。現在進行中の鉄鋼企業の構造改革は、21世紀に向けての日本鉄鋼業の存亡をかけた必死の努力といえます。

鉄鋼技術の面から見ても、この10年間の進歩は大きいものの、一方では変化の予兆も見られます。例えば製品の付加価値化、高性能化の方向に加えて、大幅なコスト低下の必要性がでております。このような大きい方向性の変化は、1990年代後半にかけてますます明瞭になるものと思われまます。そこでこの80周年記念特集号は、最近10年間の鉄鋼技術の進展をたどり、これにより21世紀に向けての方向を見通すことを志向するものとして、サブタイトルを「21世紀に向けて—鉄鋼技術10年の軌跡」とし、その内容に特徴を持たせることにしました。

本特集号はこの10年間の鉄鋼技術の進歩を回顧する第1部と、肩の凝らない読み物と年表からなるISIJ情報ネットワークの第2部で構成されています。第1部の鉄鋼技術の軌跡では、編集方針として網羅的でなくあくまでも鉄鋼技術の「大きい流れを把握する」ことにしました。これは鉄鋼技術が進歩した結果、専門化、細分化が進み、従来のような網羅的な記述が困難になり、またそうすることにより大きい流れを見落とす恐れがあると考えた結果であります。この方針に沿って、本特集号編集小委員会の各分野担当の委員がその分野で重要な技術的展開と考えられる少数のトピックスを選定し、執筆することになりました。あくまでも「流れ」と読み易さを主眼とするため、原則として引用文献は省くことにしました。後世、トピックスの選択が誤っていたと批判されることがあるかもしれませんが、本編集小委員会が最良の努力を尽くしたことに免じて予めお許し願いたいと思います。以上の編集方針の結果、各記述はそれぞれの専門分野の読者のみならず、他の分野の読者にも理解しやすくなっていると自負しております。

「鉄と鋼」のISIJ情報ネットワークは従来から会員に対し有益な情報を伝え、また有用な解説記事などを掲載して会員の啓蒙をはかってきました。本特集号では第2部としてさらにその記事を充実させることを試みました。まず今までの鉄鋼技術の進展をふまえつつ、21世紀の鉄鋼技術を展望する座談会をそれぞれの分野の識者に参加していただいて実施し、記事にしました。会員の皆様の蒙を開く一助になるものと信じます。さらに気楽な読み物として鉄鋼分野での「サクセスストーリー」、「鉄に魅せられた人」、「私の鉄—夢ロマン」を企画、掲載しました。加えて特別企画として各種の統計、年表を編集、掲載することにいたしました。特に年表としては「鉄鋼生産技術年表」と「産業別鉄鋼生産年表」を掲載しました。この種の年表は従来ほとんどその例がなく、初めての試みのため誤りなしとはしませんが、読者にとって長く有用な参考資料となることを願っております。特に前者においては長期的な技術動向を回顧して将来技術を予測するために、また後者は需要分野との関わりの中で製品開発動向を予測する上で、重要な資料になると信じております。

本特集号はこの刊行のために設置された80周年記念特集号編集小委員会によって企画、編集されました。長期間にわたり労を惜しまれずに協力された小委員会の委員の方々と、日本鉄鋼協会編集・業務室の担当の方々に心から感謝の意を表します。とくにISIJ情報ネットワークの企画、編集については、編集委員会和文会誌分科会モニター委員の方々に大変お世話になりました。併せてお礼申し上げます。